

「与薬忘れ」防止の取り組み

ープロセス指向に着目した与薬業務の標準化ー

三ツ倉裕子¹⁾ 高橋陽子¹⁾ 美原 盤²⁾

1) (公財)脳血管研究所美原記念病院 看護部

2) (公財)脳血管研究所美原記念病院 院長

【はじめに】

プロセス指向とは、「良いプロセスが良い結果を生む」という考え方にに基づき、業務を適切に実施するために、仕事の仕組みを変えていくことである。当院のインシデント・アクシデント報告では薬剤関連の報告は全体の約3割を占め、看護師による与薬忘れは67%にのぼっていた。与薬業務は複数のプロセスで構成され、そのいずれかのプロセスでミスが発生している。そこで、プロセス指向をもとに与薬業務のスリム化と標準化を行い良好な結果を得たので報告する。

【活動経過】

平成22年、与薬業務の煩雑化を軽減するため、看護師による毎日のベッドサイド配薬を中止し、クリップボードを活用した管理方法を導入したが、与薬忘れの発生件数減少には繋がらなかった。与薬手順を振り返ると保管・準備・投薬・確認の各々のプロセスにおいて各病棟で異なり、病院としての標準化がなされていなかった。与薬忘れが多く発生していた病棟では、準備・投薬のプロセスにおいて確認作業が多く実施されていたが、与薬忘れの検出までに時間を要していた。一方、与薬忘れの少ない病棟では、与薬後の確認をダブルチェックする事で早期に与薬忘れを発見していた。各病棟に現状をフィードバックし、準備・投薬のプロセスの標準化と与薬後のダブルチェックを徹底した。また、与薬忘れが多く発生していた臨時処方の内服は、各病棟ともに薬袋に入れた状態で管理されていたため、薬袋での保管・管理は禁止した。その結果、平成25年12月の与薬忘れは18%まで減少し、与薬忘れが検出されまでの時間は短縮された。

【まとめ】

プロセス指向による業務改善策は、与薬業務のリスクマネジメントの一つとして有用であった。